

カテーテルを使った脳血管内治療がスタート 循環器内科と脳神経外科で実施

城西病院では、4月から血管カテーテル装置を使った脳血管内治療がスタートしました。カテーテル装置は、2013年12月に筑西・下妻地域緊急医療体制整備事業として導入し、心臓カテーテル治療・検査をすでに開始。脳神経外科でも活用することによって、患者さまの身体への負担が少ない治療を行っています。

カテーテル装置は、血管内に直径約1～2ミリの細い管（カテーテル）を入れ、血管の狭窄や梗塞などをバルーン（風船）やステント（網目状の筒）を使って治療したり、造影剤を入れて検査する装置。血管の3次元映像を映し出すこともでき、放射線の被ばくも最小限に抑えることができます。

5月29日に行われた手術は、頸動脈の狭窄症に対する手術で、患者さまは軽い脳梗塞の症状を訴えられていたといえます。手術は、足の付け根の大腿動脈に小さな穴を開け、動脈の内部にカテーテルを通して頸動脈まで入れ、閉塞している部位にバルーンを入れた後、ステントを挿入し、血管を広げて手術を終えました。患者さまは手術の翌日には一人でトイレに行ったり、食事もとったりしたといえます。

手術に当たった脳神経外科の後藤晴雄部長は、「全身麻酔で首を切開し、頸動脈の処置をする手術では、患者さんが動けるようになるまで数日かかる。カテーテルでの手術は、麻酔のリスクが少なく、手術跡も小さく、翌日にはすぐに動けるようになります」と話します。

後藤部長は、兵庫県出身で今年4月に城西病院に赴

後藤晴雄
脳神経外科部長



任しました。東京大学を卒業し、獨協医科大学附属病院で勤務。「大学病院だと専門分野での診療になってしまう。地域医療で身近に患者さんと接し、自分で患者さんを診ていきたい」と話します。赴任早々、新型コロナウイルスが拡大し、城西病院でも感染症対策の一員としても対策に取り組んできました。「地域医療は、いろいろな経験ができる楽しさがあります」とも。カテーテル治療は、脳疾患の救急医療でも期待されている分野で、「ゆくゆくはチームを組んで取り組んでいきたい」と展望を語ります。現在、全国の脳外科医7～8000人のうちカテーテル手術を行っているのが約1000人。茨城県内では約20人で、地域の病院で行っているところはごくわずかといえます。後藤部長は「脳の手術は患者さんにとって恐怖がいっぱいです。コミュニケーションをとって不安を取り除き、最良の医療を提供していきたい」と話していました。

2020年6月4日

